

特別支援学校高等部（分校）の生徒と大学生との交流（1）

—特別支援学校の先生が捉える継続的な交流の意義と課題：3年間の交流を通して—

小野里 美 帆（文教大学教育学部）
小 林 直 紀（埼玉県立草加かがやき特別支援学校 校長）
杉 山 功 一（埼玉県立戸田かけはし高等特別支援学校 校長）
相 澤 靖 子（埼玉県立越谷西特別支援学校 校長）
林 豊（埼玉県立越谷西特別支援学校松伏分校 教頭）
西 澤 香（埼玉県立越谷西特別支援学校松伏分校）

Interactions between Students of the High School Department
(Branch School) of a Special Support
School and University Students (1)
-The Significance and Challenges of Continuous Interactions
Perceived by Special Support School Teachers: through a Three-Year
Interaction Program-

ONOZATO MIHO, KOBAYASHI NAOKI
SUGIYAMA KOICHI, AIZAWA YASUKO
HAYASHI YUTAKA, NISHIZAWA KAORI

(Faculty of Education, Bunkyo University)

(Principal, Saitama Prefectural Soka Kagayaki Special Needs School)

(Principal, Saitama Prefectural Toda Kakehashi Senior Special Needs School)

(Principal, Saitama Prefectural Koshigaya Nishi Special Needs School)

(Vice Principal, Matsubushi Branch, Saitama Prefectural Koshigaya Nishi Special Needs School)

(Matsubushi Branch, Saitama Prefectural Koshigaya Nishi Special Needs School)

要 旨

県立特別支援学校高等部（分校）と、教員養成大学の大学生との間で、各校の教員間の企画により、3年間にわたる定期的な交流を実施した結果を踏まえ、特別支援学校の教員を対象に交流会の実態及び課題についてアンケートを実施した。その結果、交流に際してはポジティブな意見が多く、継続における課題としては、運営・企画及び特定の教員の負担軽減、交流に対する熱意や雰囲気づくり、双方の事前打ち合わせや共有が重要であることが指摘された。

1. 問題と目的

文部科学省（2022）によると、知的発達に遅れのある子どもを除き、学習面または行動面で著しい困難を示す子どもは、通常学級に8.8%在籍していることが指摘されている。

この事実は、支援ニーズのある子どもへの対応は、もはや「特別」とは言えない状況にあることを示している。多数派も少数派も、共に生きやすい世の中を設計していくうえでは、社会全体の変容が欠かせないが、保育・教育

にかかわる者は、障害や子どもの発達にかかわる知識、技術、多様性についての理解がますます重要になってくると考える。

現在、教員の養成において、特別支援教育は必修科目となっているが、現場の実態を鑑みると、単位数は十分とは言えず、加えて、養成段階で、障害のある子どもについての理解や具体的なかかわりを通して考える機会を作ることが必要である。尾島・小野里・杉本(2006)は、保育者養成に際し、具体的に障害のある人と接する経験を通して、障害理解や価値観の変容が推進されたことを指摘している。教員を志望する学生にとって、特別な支援を必要とする子どもたちとのかかわりは、多様性について自分事として捉える一助になる可能性がある。しかしながら、大学と支援ニーズのある機関との継続的な連携及び交流についての報告はほとんど見当たらない。

近年、通常学級と特別支援学級など、異クラス間の交流及び共同学習や学校間連携の推進が求められている。五十嵐ら(2017)は、小・中学校の特別支援学級において、交流学習が積極的に取り入れられていること、特別支援学校の9割以上の児童生徒が地域の小・中学校との学校間交流を行っていることを報告している。一方で、赤間ら(2016)は、特別支援学校高等部生徒と地域の高等学校との学校間交流が小・中学部に比べ少ないこと、高等部の交流に関する検証が極めて少ないことを報告している。同時に、「社会への出口となる高等学校段階であるからこそ、お互いの人間性や社会性を高める交流および共同学習の充実が必要である」と、高等部における交流経験の重要性を指摘している。

交流に際して重要なことは、交流の質と継続性である(永浜・小島, 2019)。学校間交流の多くは、年1回という頻度である。本質的な他者交流を実現するうえでは、一定の頻度で継続していくことが不可欠であろう。そのためには、無理なく継続できるシステムづ

くりや交流の意義について双方が理解し、共有していくプロセスが重要であろう。

筆者は、知的障害特別支援学校高等部(分校)と大学生との3年間にわたる交流に携わってきた。特別支援学校と大学生との交流についての研究報告はほとんどないのが現状である。永浜ら(2019)が、特別支援学校と大学生との交流とその意義について報告しているものの、交流期間は4か月という短期間である。本研究では、3年間の交流を経て、特別支援学校の先生方が交流会をどのように捉えているか、アンケートへの回答を通して検討することとした。

特別支援学校の分校とは、通常の高等学校内に設置された特別支援学校(普通科)であり、一般就労を目指して、一般的な教科学習に加え、就労に向けた様々な職業教育(食品加工、農園芸、オフィス作業、ビルメンテナンス)が行われている。入学選考を実施し、合否が決定される。本校とは、1-2駅ほど離れた場に設置されていることが多い。高等学校内の設置のため、高校生との様々な交流や共同学習を通して、分校の生徒のみならず、高等学校の生徒にとっても、多様性を理解する一助になることが期待されている。いわゆる「分教室」とは異なり、管理職、教職員が専属で配置されており、本校との連携を図りつつ、独立した教育機関としての機能を有する。本校と分校の校長は同一である。なお、本研究では、分校の生徒を「生徒」、大学生を「学生」と称する。

2. 目的

知的障害特別支援学校高等部(分校)と教育学部に所属する学生との3年間にわたるオフィシャルな交流会を経て、特別支援学校の教員が交流会をどのように捉え、どんなことを課題として考えたか、アンケートへの回答を通して検討することとした。

3. 交流の概要

1) 交流の対象と経緯

対象は、X県A高校内に設置された、B特別支援学校（知的障害）C分校（高等部）と、D大学である。C分校の定員は1学年16名×3学年であり、知的障害、あるいは知的障害とASD、ADHD等を併せ持つ生徒が在籍している。教員数は、管理職を含め、24名である。C分校設置時に、分校側から筆者に、交流・連携の依頼があり、交流を開始する契機となった。交流の方法については、管理職、特別支援教育コーディネーター、筆者による話し合いで決定した。その後、管理職が交替しても交流が継続できるよう、D大学教育学部とC分校とで正式な提携を結んだ。なお、C分校は、D大学の最寄り駅からバスで16分程度であり、アクセスは良好であった。

2) 交流のコンセプト

交流に際しては、学生が生徒を支援するというかわりではなく、対等にかかわる「友達作り」を目標とし、交流に参加する学生、生徒に対しても、事前に説明を行った。また、交流の意義について、分校の生徒及び学生双方の対人交流面での経験不足を補う一助になること、継続的な関係をつくること等、折に触れ関係者間で話し合い、共有した。交流会当日は、生徒及び学生が交流会の司会・運営等を実施することとし、各学校の教員は事前にそのサポートを行った。

3) 交流の具体的内容

(1) 実施期間：20××年4月～20××年+3年3月。

(2) 参加者：生徒は、分校設立1年目は1学年16名、2年目は2学年32名、3年目は3学年48名。学生は、特別支援教育を専攻している教育学部3、4年生。筆者のゼミ生ならびにゼミ以外の希望者であり、1年目は8名、2年目は10名、3年目は12名。原則として、3年生は次年度も継続するため、ほぼすべての学生が2年間、交流に参加することとなる。

交流会には、筆者及び分校の先生のほとんどが参加した。参加する学生には、交流会の意義について説明し、理解と同意を得た。

(3) 頻度：1年目は、新型コロナ対応も考慮し、オンラインによる交流を7回実施。2年目以降は、対面による交流を年4回ずつ実施した。

(4) 年間の交流の流れ

①事前に、筆者と分校の特別支援教育コーディネーターの間で、企画、運営、日程調整等の打ち合わせを実施する。年度当初は、管理職も含めて打ち合わせを実施した。交流に際しては、学生、生徒混合で、全体を4つのグループに分けて実施した。

②事前学習：1回目の交流前に、コーディネーターが大学を訪問（1年目はオンラインで実施）し、学生に向けた事前学習（事前に知っておく必要のある留意点の共有）と交流会当日にかかわる打ち合わせを実施した。分校側でも、毎回の交流会前には、事前学習を初回1時間（2回目以降は20分程度）実施し、交流会参加への動機づけを高めた。2年目以降は、分校側の要請により、学生が生徒に向けたビデオレター（所要時間1分程度）を送り、交流への動機づけを高めた。

③交流会1回目（7月）、90分程度：学生が分校を訪問。グループごとに自己紹介と雑談。生徒が自己紹介カードを配布することもあった。学生が企画したゲーム、大学紹介（VTR）とクイズを実施した。司会は生徒が担当。

④交流会2回目（9月）9：30～15：00：生徒が大学を訪問。1～2年目は学内ツアーやオリエンテーリング、3年目は大学の施設を利用したレクリエーション（サッカー、バスケットボール、バレーボール、ヨガ、ダンス、折り紙、けん玉、カードゲーム、ICT、美術、英語講義体験等）を実施した。レクリエーションは、事前に生徒にアン

ケートを依頼し、好みと希望を考慮し、学生が企画。役割分担等、運営も含めて数回話し合いを行い、検討した。当日は、学生が主導して進めた。大学教員は適宜助言を行った。

- ⑤交流会3回目（11月）13：30～15：30：大学生が分校を訪問。分校で10月に行われた文化祭の催し物を生徒が再現した。学生は、カラオケ、ダンス、コント等のステージパフォーマンスを観劇し、複数の教室で実施されるゲーム（射的、輪投げ）やお化け屋敷等に参加した。案内・進行は生徒が主導した。
- ⑥交流会4回目（2～3月）9：30～12：00：学生が分校を訪問。4つの作業学習（食品加工、農園芸、オフィス作業、ビルメンテナンス）のいずれかに学生が参加し、生徒が学生に作業内容を教示した。終了後はお別れ会を実施。大学生は、あらかじめ準備した寄せ書きを各グループにお礼として手渡した。

4. 研究方法

1) アンケートの実施

3年間の交流を終えた翌年、アンケートを実施。配票留め置き、回答期限は1か月。配布数は24部、回答数22名、有効回答は、89%であった。アンケート項目は以下のとおりである。③以外はすべて自由記述である。

①教職歴

Table 1 当該校の先生方の教職歴（臨時採用を含む）

教職歴	1 - 5年	6 - 10年	11 - 15年	16 - 20年	21 - 25年	26 - 30年	31 - 35年
人数	8	2	3	0	1	1	7

N = 22

Table 2 当該校における赴任歴

赴任歴	1年目	2年目	3年目	4年目
人数	7	4	6	5

N = 22

- ②現在の赴任校における教職歴
- ③特別支援学校赴任経験の有無
- ④交流会の実施回数（年4回程度）は妥当であるか？（妥当、妥当ではない、わからない）
- ⑤交流をするうえで大変なことは何か？
- ⑥交流を実施してよかったこと：生徒や学校にとって
- ⑦交流を実施してよかったこと：先生ご自身にとって
- ⑧交流や連携を継続していくうえで必要なことは何か？大事にしたいことは何か？
- ⑨交流を実施するうえでの課題はなにか？
- ⑩ご意見、ご感想を自由にお寄せください。

2) 分析方法

項目⑩以外は、回答内容をカテゴリー化し、頻度を算出した。1名の回答者が2つ以上のカテゴリーに言及している場合は、それぞれのカテゴリーにカウントした。

4. 結果

Table 1は教職歴、Table 2はC分校での赴任歴である。Table 2において、2年目と回答している先生は、交流経験1年、3年目と回答した先生は交流経験2年、4年目と回答した先生は分校発足当初から3年間、交流に参加したこととなる。Table 3は、これまでに特別支援学校に赴任した経験の有無であり、17名が、1度は特別支援学校で勤務した経験があることが明らかになった。

Table 3 特別支援学校を担当した経験

特別支援学校担当歴	ある	ない
人数	17	5

N = 22

Table 4は、交流会頻度の妥当性についての回答であり、1名を除き、年4回という回数が妥当であると回答している。

Table 5は、交流において大変なことは何かという問いに対する回答結果である。企画、準備、役割分担といった運営面についての言及が9であった。分担及び継続に関しては、「打ち合わせや学校内での日程調整など、担当者が変わっても継続していける業務内容なのかが気になる」といった記載があった。準

備については、いずれも日程調整の必要性が指摘された。対人交流という面での大変さに言及した回答は6であり、特に、「対人交流に慣れていない生徒への配慮」の必要性について言及された回答が5であった。具体的には、「人とかかわりが苦手な生徒もいるのでフォローしながら少しでも交流を楽しめるようにすること」「年4回だと忘れてしまうこともあるため、生徒と学生の関係形成の手伝いに悩む」といった言及があった。

Table 4 交流の回数について

回数	妥当	わからない
人数	21	1

N = 22

Table 5 交流における大変さ

カテゴリー	企画	準備	役割分担	対人交流に慣れていない生徒への配慮	関係の維持	大変さはない	回答なし
回答数	3	2	4	5	1	3	5

Table 6は、生徒や学校にとって、交流を実施して良かったことについての回答結果である。交流の機会があり、非日常的な経験ができることに意義がある（回答数5）、歳が近い年齢で交流しやすい（回答数3）、生徒が楽しそう（回答数3）であった。コミュニケーションや他者意識といった観点についての言及も目立ち、「初めての人とのコミュニケーションの取り方を学習できた」（回答数3）、「コミュニケーションをとることへの自信につながる」（回答数2）、「社交性への向上」（回答数2）、「お互いを認める」（1）、「教える、教えあう」（回答数1）であった。

Table 7は、教員にとって、交流を実施して良かったことについての回答結果である。生徒のポジティブな面を見られることが嬉しいという回答が4、大学生のかかわりや成長を見られることの良さについての言及が7で

あった。他に、「自分自身も学ぶことがあった、良い経験になった」（回答数1）といった言及も認められた。

Table 8は、交流を継続するうえで必要なこと、大事にしたいことについての回答結果である。目的の明確化、キーパーソンの存在の重要性、年間計画の中に位置づけるといった、交流の目的、準備等の運営についての言及が8と、最も多かった。次に多かったのは、交流の（意義について）の理解、関係者の熱意や雰囲気づくりであり、「学校（管理職）の方向性と教員の熱量が合っていること」、「双方の理解」、「身近なものであるという雰囲気づくり」といった回答が認められた。「生徒の動機付け」という回答もあった。他には、事前にお互いの生徒、学生を知ることを通して、理解すると共に、不安を軽減するという回答も認められた。

Table 9は、交流を継続するうえで課題と考えることにかかわる回答結果である。交流の具体的内容、方法についての言及が8と最も多く、「大学生と生徒の人数に差がある」「積極的にかかわる特定の生徒のみの交流にならないようにする工夫」「やらされていると感じている生徒もいる」「年4回では少ない」といった回答が認められた。具体的な記述をみると、「当初に班毎に顔写真付き一覧を作るなどして、この人と交流しているとい

う意識を深める」「交流に先だって『こんなことしてます、交流ではこんなことしたい』といったカードをとりかわす。等々、負担を感じない程度で…。』といった記載があった。次に多かったのは、交流会の運営に関する言及であり、分校側の担当者の負担だけではなく、「大学生からのメッセージを生徒は喜んでいたが、大学生の負担を考えると減らしていてもいいように思った」といった、大学側の負担についての言及が認められた。

Table 6 交流を実施して良かったこと：生徒、学校にとって

カテゴリー	回答数
機会があること・非日常的な経験・大学に行けることが有意義	5
少し年上の（歳が近い）年齢で交流しやすい	3
生徒が楽しそう	3
初めての人とのコミュニケーションの取り方を学習	3
コミュニケーションをとることへの自信につながる	2
社交性への向上につながっている	2
生徒の実態を広く理解してもらえる場	2
進路決定に際し参考になる	1
お互いを認め合うことができる	1
教える、教えあうことができる	1
学校以外の地域的つながりの場を持てる	1
大学とのつながり	1
回答なし	1

Table 7 交流を実施して良かったこと：教員自身にとって

カテゴリー	回答数
<u>生徒について</u>	
生徒が非日常の空間を楽しんでいる様子を見るのが嬉しい	2
普段見ることができない生徒の様子や反応を見られる	2
<u>大学生について</u>	
大学生の真摯な姿勢に伝わるものがあった	2
今の大学生の様子を知れた（初任者への対応の参考になる）	2
大学生の成長も見られて嬉しかった	1
大学生にもプラスになっていることを感じた	1
生徒とのかかわり方が参考になる	1
<u>交流について</u>	
今後の交流を行う上でのヒントをもらった (学生が考えたレクが、学校で応用できる)	1
連携が深められた	1
<u>自分自身について</u>	
自分自身も学ぶことがあり、良い経験になった	1
伝え方、人と人との橋渡し（つなげること）	1
<u>その他</u>	
自分も通っていた大学なので訪れることができて嬉しかった	1
回答なし	4

Table 8 交流を継続するうえで必要なこと、大事にしたいこと

カテゴリー	回答数
<u>交流の目的、準備、役割、協働等</u>	
目的をはっきりさせる／ねらい通り進められているかの振り返り	2
キーパーソン（交流の窓口）となる教員	2
年間指導計画内で設定していく	2
場所の活用（分校、大学双方に訪問するなど）	1
課題点の共有	1
交流の継続	
<u>交流への理解、熱意、雰囲気</u>	
学校（管理職）の方向性と担当教員の熱量と方向性が合っていること	1
同じベクトル／双方の理解	2
交流や連携が特別なものではなく身近なものであるという雰囲気づくり	1
（交流を進めるための）雰囲気づくり	1
役割を担うこと、任せられる存在であること	1
生徒の動機付け	
<u>事前にお互いの生徒、学生を知ること</u>	
生徒の実態の事前理解	1
事前にお互いのことを知り、不安や拒否感を軽減する	1
<u>コミュニケーション</u>	
うまくコミュニケーションをとる方法	1
回答無	4

Table 9 交流を継続するうえでの課題

カテゴリー	回答数
<u>交流の具体的内容、方法について</u>	
学生、生徒にとって楽しい交流は何かを考えながら継続する	1
どんな相手でもうまくコミュニケーションをとる	1
大学生と生徒の人数に差があるため、学年ごとなど少人数同士の交流もよいかもしれない	1
交流方法の工夫（積極的にかかわる生徒のみの交流にならないように）	1
交流方法の工夫（交流している相手の意識を高める）	1
やらされている、仕方なくやっていると感じている生徒もいるため、魅力的な企画（大学生の1日体験、授業を受ける等）があるとよい	1
年4回では関係を築くのに時間が足りず、交流が薄くなる	1
教員志望の学生なので、もう少し学生主体の活動をしたり生徒や教員と関わることで職場の雰囲気が感じられたり指導力の向上につながる	1
<u>交流会の運営、規模、負担軽減について</u>	
大学教員の事前打ち合わせが双方の負担の少ないかたちで今後も継続したい	1
学校の担当責任者の負担軽減、役割の分担	1
大学生の負担軽減	1
希望する学生がどれくらいいるか	1
後輩に伝えていくこと	1
<u>交流会の設定について（定例以外の交流をしたい）</u>	
定例の交流会以外の交流をしたい	1
交流という形にとらわれないやり方、自然な形での交流を通してお互いに学びあう	1
普段の学習活動の延長でできる工夫	1
特になし	2
無回答	4

5. 考察

特別支援学校の教員による回答結果を概観すると、C分校の教員は、全般的に、3年間の交流について、ポジティブな評価をしていることが明らかになった。アンケートへの記載内容については、具体的な提案を含む言及も目立った。これらの背景として、以下が考えられる。①分校設立当初に、学校の特色として大学との交流を明確に位置付けたこと、②①を支える基盤として、大学と正式な提携を結んだことで、管理職が交替しても継続できる仕組みを作ったこと、③①、②は、受検者を確保するという点でのメリットにもなるため、教員の共通理解や動機づけにつながった可能性があった、④設立当初から、管理職が主導し、教員の理解を得る努力をしたこと、⑤分校設立当初、交流についてポジティブに考えられる教員が多かった、⑥小規模校ゆえに、年4回の交流会にはほぼすべての教員が参加し、情報共有、意見集約がしやすかった、⑦交流の目的を「友達作り」「対人交流面の経験不足を補う」と明確に位置付け、意義を共有したこと。「支援される側・する側」という関係ではなく、インクルーシブという視点から、受け入れやすい価値観であった可能性がある。⑧分校、大学間で、メールも活用したやりとりが日常的に行われたこと。⑨大学側では、原則として、交流を希望する学生が参加しており、かつ、特別支援教育を専攻する学生であったため、交流についての障壁が少なく、障害のある児童生徒とのかかわりに慣れている学生も少なくなかったこと。

今回は、3年間という、長期的な交流であることを踏まえ、交流会開始前に、大学側で事前学習を行った。村田ら（2016）は、交流において重要なのは、障害理解であり、そのためには、交流会の前の事前学習が重要であることを指摘している。継続的な交流ではあるが、年4回という交流会の頻度を考慮する

と、本研究においても、事前学習を行ったことは効果的に作用した可能性がある。

今後、交流を継続していくうえでは、アンケート結果から明らかになった、負担軽減や実質的な交流につながる内容の工夫、対人交流を必ずしも得意としない生徒や学生への配慮についての検討が課題になる。

今回は、小規模校すなわちアンケートの回答数が少なく、交流の在り方について一般化することは困難である。そのため、交流のさらなる継続による知見の蓄積と共に、データ数を増やしていくことが必要である。また、大学生にとっての交流の効果についての検証も必要であろう。

【謝辞】 本研究に記載した交流の立ち上げ及び交流会実施に際し、ご尽力いただいたすべての先生方に深謝いたします。また、交流会に参加するだけでなく、企画・運営に携わったすべての大学生に深謝いたします。

引用文献

- 赤間樹・佐藤慎二『A県特別支援学校高等学校と高等学校の学校間の交流及び共同学習に関する調査研究』植草学園短期大学紀要, 17, 2016年. p.91-99
- 五十嵐ひとみ・河合康『小学校の通常の学級における知的障害理解教育に関する調査研究』上越教育大学特別支援教育実践研究センター紀要, 23, 2017年. p.23-29
- 文部科学省『通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果（令和4年）について』2022, https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/2022/1421569_00005.htm（2023年9月25日閲覧）
- 村田花子・鈴木洗平・藤嶋さと子・細谷一博『小学校と特別支援学校の学校間交流における障害理解促進を目指した事前学習授業の実践』北海道特別支援教育研究,

10, 2016年. p. 1-9

永浜明子・小島ちなみ『インクルーシブ教育の実現にむけた身体活動を伴う交流会の有用性—特別支援学校高等部生徒と大学生との交流を通して—』京都滋賀体育学研究, 35, 2019年. p.2-12

尾島万里・小野里美帆・杉本直子『保育士養成における学生の障害児・者に対する意識変化—施設実習を通して—』洗足論叢, 34, 2006年. p. 35-43,

